第５回：着物はみな身のうち

教場長　田中仙融

気温が上がり、夏の装いが恋しい季節がまいりました。

電車にのっていると、気に掛かることがあります。つり革の持ち方です。指が揃っていないとか、そんなことではありません。女性も男性も同じように腕を上げているように思えるのです。
着物でつり革に手をのばすときには、洋服のときとは少し違う意識をしませんか？袖があがって腕が見えてしまわないように、少し脇を閉めるようにして手を出すとよいように思います。バンザイと脇を気にせずに手を上げるのではなく、少し袖を気にしながら伸ばしているところに、はんなりとした美しさを覚えます。

洋服でのしぐさに慣れてしまった私たちには、思いがけなく、点前の中での所作にその弊害が生まれているように思います。いろいろな部分で脇が甘いのです。そして、自分の着物の袖や裾を余り大きく動かさないようにしよう、という意識がなくなってしまったように思います。そのため、皆さまも経験がおありのように、建水に袖が入ってしまったり、茶碗に袖が振れてしまったり、座るときに大きく裾が乱れたりしてしまうのではと思えてきました。

帛紗を腰につけるとき肘を脇から離さずに、脇に添ってあげるようにして帛紗をつけると、袖は身体からそんなに離れずに済むはずです。また、柄杓を扱って湯を汲むときにも、袖を左手で押さえなくても身体に沿って柄杓を釜に向かわせれば、袖も一緒に身体に付いてきます。さらに、お座りになるとき、右の裾をご自分の膝下に巻き込むようなつもりで座ってみませんか？あまり裾が乱れずに座れるのではないでしょうか？

テキストなどには記されていませんが、自分がまとっているものはすべて、自分の身体として暮らしていた先人の知恵を思い出し、身につけ、伝えていくと素敵なお茶人になれるかなと日々格闘中です。

平成 25 年 05 月発行　会報「えんじゅ 75 号」掲載